

日本語話し言葉における情報構造と語順

中川奈津子 (同志社大学 全学共通教養教育センター)

Information Structure and Word Order in Spoken Japanese

Natsuko Nakagawa (Doshisha University)

要旨

本発表では、日本語話し言葉コーパスの模擬講演と対話を用い、日本語話し言葉の語順と情報構造の関係について調査した。(1) まず、コーパスから名詞・代名詞とゼロ代名詞を抽出し、(2) それぞれの照応関係と項構造を同定した。(3) そして、それぞれの表現の情報の新旧を調べ、新情報(先行詞なし)と旧情報(先行詞あり)に分類した。(4) 次に、コーパスの語順情報を使って、述語ごとに名詞・代名詞の語順を同定し、語順と関連する属性を調べ、(5) それぞれの用例を詳しく分析した。以上の調査から、(1) 定情報を表す表現は節頭に、(2) 焦点と関わる名詞は動詞の直前に現れるという結果を得、先行研究の指摘を実証的に確かめた。また、(3) 述語の後(発話末)に現れる要素は活性化コストが低い名詞であることを明らかにし、(4) 以上の傾向の動機づけを提案した。

1 はじめに

1.1 本研究の問い

本研究では、日本語話し言葉における情報構造と語順の関係を探る。例えば、以下の会話の断片(1)を見てみよう。

- (1) a. **A1:** 楽しいねー音楽
 b. **B2:** うん 楽しいよー
 c. **A3:** いいなーちょっと音楽部に入りたかったなー
 d. **C4:** (イナ) 今からでも合唱団どう (千葉大3人会話コーパス 0332: 72.69-81.30)

(1a)では、「音楽」が述語の後に生起しているが、一方、(1d)における「合唱団」は述語の前に生起している。このような語順を決める要因は何だろうか？

さらに会話の断片(1)を詳しく観察してみると、(1a)はすでに「音楽」の話が出たあとの発話であることに気がつくかもしれない。それに対して、(1d)における「合唱団」は、話し手によって新たに提案されている。このように、すでに以前に出たとか、新たに提案されているなどと聞き手が(そして観察者が)わかるのは、ある程度、言語にその情報が埋め込まれているからだと考えられる。筆者はこれを発話における情報構造と呼び、情報構造が言語的にどのように伝達されているかに関心がある。本研究では、情報構造と特に語順の関連について詳しく調査する。

1.2 本研究の立場

本研究では、すでに話に出たもののことを「話題」と呼び、新たに提案されたもののことを「焦点」と呼ぶ。より詳しくは、以下のように定義する。話題と焦点は「もの」であるとは限らず「命題」の可能性もあるが、本研究では「もの」を中心に扱い、「命題」は対象外とする。

- (2) **話題**とは、話し手と聴き手の間ですでに共有されていて「それに関しては異存はない」という同意が得られていると、話し手によって想定されているものを指す。
- (3) **焦点**とは、聞き手にとってニュースであり「聞き手が異論を唱えるかもしれない」と話し手に想定されているものを指す。

このことは例えば、以下のようなテストでも確かめることが出来る。次の話し手により「違うよ」の後で訂正されるのは、焦点のみであり、話題を訂正すると不自然になる (Erteschik-Shir, 2007, p. 39)。このことは「焦点だけが異論を唱えようと想定されている」ことを利用している。(4)を例にして、(4a)の「太郎」を話題、「教授」を焦点と仮定すると、次の話し手(4b)によって訂正されるのは、焦点の「教授」のみであり、同じ手続きによって話題「太郎」を訂正することはできない。

- (4) a. 太郎って教授なんだって
b. 違うよ、{??次郎/助教}だよ (作例)

このように話題と焦点をテストによって確かめることができるが、発話の中で一義的に「これが話題/焦点である」と決められるものではなく、複数の特徴が合わさって「話題らしさ」「焦点らしさ」を構成すると考える (Givón, 1983; Du Bois, 1985)。「話題らしさ」「焦点らしさ」を構成する特徴として、Givón (1976); Keenan (1976) に基づき、表1を想定する。

表1 情報構造に関わる特徴

	話題	焦点
話者の想定	前提	断定
情報の新旧	旧	新
定性	定	不定
有生性	有生	無生
項構造	動作主	被動作主
推論可能性	推論可能	推論不可能

2 先行研究

日本語の語順研究は佐伯 (1998) に詳しくまとまっている。これを見る限り、伝統的な日本語学では、助詞や助動詞の相互承接の問題、係り受けの問題が中心課題のようである。プラグ学派の伝統に基づく日本語とチェコ語の語順を情報構造の観点から分析したフィアラ (2000) や、生成文法に基づく Nemoto (1993); 遠藤 (2014) なども存在する。これらの研究は、作例に基づくか、用例収集にとどまっている。また、書き言葉が分析の中心となっている。Matsumoto (2003) はイントネーション・ユニットの観点から大量の話し言葉のデータをもとに語順を分析しており興味深い結果を報告しているが、イントネーションが単位となっているため1つの述語がとる項どうしの順番に関する一般化は得られていない。Ono and Suzuki (1992); 高見 (1995a,b); Ono (2007) は、後置文を分析している。相互行為の観点から語順を分析した Tanaka (2005) もある。Yamashita and Kondo (2008) は CSJ を調査し、句の長さや情報の新旧の双方が語順に影響を与えていると結論づけている。

本研究は、先行研究の成果に反論するわけではなく、機能的な観点から多角的な変数を考慮し、実際の話し言葉に基づいて語順と情報構造の関わりをより一般的に明らかにし、その傾向の背後にある言語使用に基づく動機づけを解明することを目指す。

3 調査手順

3.1 コーパス

本研究では、日本語話し言葉コーパス (CSJ: 前川, 2006) の模擬講演 12 回分を用い、語順と情報構造の相関を調べた。模擬講演は日常的な話題 (「人生で一番嬉しかったこと」や「悲しかったこと」など) に

関して一般の話者が話したものである。聞き手は3-4名で、1講演10-15分である。なお、本研究で利用したのはCSJのRDB版小磯ほか(2012)である。

3.2 手順

Givón (1983); Nakagawa and Den (2012)の方法を応用して、コーパスから4614の名詞(ゼロ代名詞を含む)を抜き出し、それぞれの照応関係を同定した。次に、名詞の項構造、情報の新旧を半自動で同定した。各々の定義と変数の種類は表2のとおりである。表1のうちからこれらの変数を選んだのは、アノテーションが比較的客観的に行いやすいと考えたためである。他の変数に関しては、質的分析に留めた。

語順を同定するために、CSJのrelBunsetsu2Clauseにおけるnthという情報を利用した。この場合のnthとは、節中における文節の生じた順番である。筆者はnthと項構造の情報を利用して、共通の述語の項の順番だけを取り出した。例えばnthは(5)に示す通りフラットに節の中の文節の順番を表している。筆者はこれと項構造を利用して、ある述語の項だけを取り出したときの順番を作成した。少し込み入った

表2 変数とその定義

名前	変数の種類	定義
a. 語順	1, 2, 3, 4	名詞が節の中で占める順番
b. 情報の新旧	旧	先行詞を持つ
	新	先行詞を持たない
c. 項構造	S	自動詞の唯一項
	A	他動詞の動作主項
	P	他動詞の被動作主項
	LOC	場所を表す項
	Ex	動詞の項ではない名詞

例だが、(5)*¹では、述語「出る」の項は「私」と「外に」であり、前者が最初に生起しているので1、後者は後に生起しているので2とした。同様に、「挙げて」の項は「両親」(1)と「もろ手」(2)であり、「賛成」の項は「(私が外に出る)こと」(1)であり、それぞれの述語に関して項の生起順によって語順を決定した。

(5) 発話: [両親も [[私が外に出る] こと] に関しましては非常に もろ手を挙げて] 賛成] という

nth: [2 [[3 4 5] 6 7 9 10] 11]
 語順: [1 [[1 2] 1 2]]

(S01F0038: 183.9-188.4)

この構造の認定には問題があるかもしれないが、(5)のような込み入った例は稀であるので、今回はこの方法で遂行し、今後手法を改良していきたい。なお、(1a)のような後置文は模擬講演にはほぼ見られなかったため、この分析は対話コーパスと比較して別に行った(5節)。

情報の新旧 (information status) に関しては、当該の名詞が先行詞を持っているれば旧、持っていないれば新とした。項構造に関しては以下のようにコーディングを行った。ヲで標示され得る名詞を項としてとっている述語について、ガで標示され得る名詞をA、ヲで標示され得る名詞をPとした。ヲで標示され得る名詞を項としてとっていない述語について、ガで表示され得る名詞をSとした。以上の場合に関わらず、ニで表示され得る名詞をLOCとした。また、動詞の項ではない名詞にExを付与した。これは「象は鼻が長い」における「象」などを対象とする。定義上「項ではない」のだが、便宜的に項構造の中に含めた。

*¹ スペースの都合上、発話のフィラーを削除した。

以上の手順を終えた後、語順を独立変数、他を従属変数として一般化線形モデルで分析した。統計ソフトはRを用いた。本研究の目的は語順に関わる変数を明らかにすることであるため、名詞が1つだけしか生起していない例を分析対象から除外した。

4 結果と考察

一般化線形モデルの分析結果を表3に示す。

表3 一般化線形モデルの分析結果

4.1 後方に生起する名詞

新情報であるほうが、すなわち先行詞がないほうが、他の項よりも後に生起するという傾向があるとも言える。このことは高見(1995a)の指摘する、「焦点は述語の近くに生起する」という観察と関連し、本研究の結果は、高見の観察を裏付ける結果であると考えられる。

Coefficients	Estimate	p-value	
情報の新旧 (新)	0.241145	0.0006	***
項構造 Ex	-0.158079	0.2067	
項構造 LOC	0.423852	< 0.001	***
項構造 P	0.824221	< 0.001	***
項構造 S	0.441074	< 0.001	***

(0 ≤ '***' ≤ 0.001 ≤ '**' ≤ 0.01 ≤ '*' ≤ 0.05 ≤ '.' ≤ 0.1)

項構造のS(自動詞の唯一項)、P(他動詞の被動作主項)、LOC(場所を表す名詞)が、他の項よりも後に出現しやすいことも確かめられた。先程述べた、新情報(焦点)が述語の近くに生起する傾向があること、SとPは新情報(焦点)になりやすいこと(DuBois, 1987)を考え合わせると、述語の近くにSとPが生起するのは自然であると考えられる。もちろん「基本語順」として日本語ではAPV(Vは動詞)の順で発話することが一番自然なので、Pが動詞の直前にあるのは当たり前前の結果である。しかし本研究はこの「基本語順」が何故そのようなのかという動機付けに興味があり、そのためにこの結果を確かめておくことは重要であると考えられる。動機付けに関しては6節で議論する。

LOCに関しては、頻出するために分析の中に入れてたが、時や場所を表す場合と与格の場合で全く語順が異なると思われる。今後の課題として、二が後続する名詞をさらに分割した後で再分析する必要がある。

4.2 前方に生起する名詞

プラグ学派などにおける伝統的な観察(Mathesius, 1928)に基づき、旧情報であるほうが他の項よりも先行しやすいという結果が得られることが期待されるが、このことは本研究のコーパスからは支持されなかった。旧-新の順で生起した例は164(61%)あったのに対し、新-旧の順で生起した例は105(39%)あり、「旧情報は新情報に先行する」と一般化するには、39%は多すぎる。

しかし、確かに(6)のように旧情報が新情報に先行する例は存在する。特に「菓子パン」に注目すると、初出の(6b)では動詞の直前に生起しているが、次に菓子パン(「それ」)に言及する(6d)では「お爺ちゃん」よりも前に生起している。また、再び「菓子パン」が言及される(6f)でも「犬」よりも前に生起している。

- (6) a. 更にうちの祖父っていうのがお菓子が好きなもので
 b. よくパン屋さんで菓子パンを買ってくるんですが
 c. 買い過ぎてしまいました
 d. え(ん)それを(い)まー要はお爺ちゃんは一生懸命食べるんですけども
 e. 余って

- f. **それ**を犬にあげてしまうので
- g. その残飯で太り
- h. 菓子パンで太り
- i. 味は覚えてグルメになるという
- j. 最悪の育ち方をしてしまいました

(S02M0198: 244.48-262.82)

表現のタイプ（名詞か代名詞か）と語順の関連を見ると、図 4.2 に示すように、代名詞は前に現れることが多いことがわかる（図中の NP は名詞、Pron は代名詞を指す（Yamashita and Kondo (2008) も参照）。このように、旧情報が新情報に先行する傾向は、確かに存在すると思われる。

では、新情報が旧情報に先行している例はどのような特徴を備えているのだろうか？例を観察した結果、新情報に先行される旧情報は、指示対象の同一性が不確かであるという傾向があることがわかった。例えば (7) では、「てんかん」という名詞が何度も繰り返されるが、言及の回数にかかわらず動詞の直前に生起している。てんかんは、具体的なものを指す名詞と異なり抽象的な病気の症状を指しているため、1 度目のてんかんと 2 度目のてんかんが同一かどうか、曖昧である。

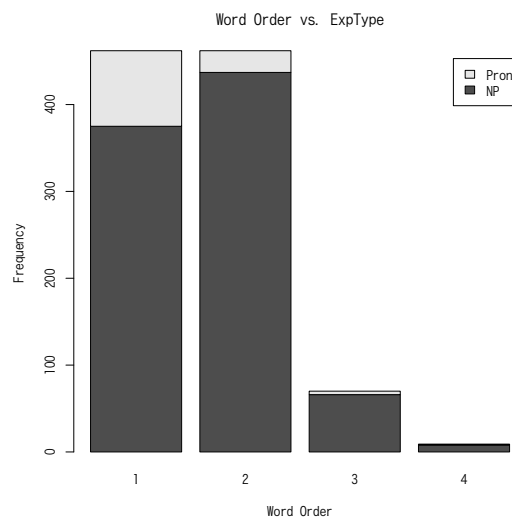


図 1 語順と表現タイプの頻度

- (7) a. [飼い犬が] あと一回**てんかん**起こしたら死ぬって言ってたんですけど
- b. またそそうこうしてるうちに**てんかん**起こしまして
- c. ... (130.8 秒省略。このときは復活したがその後数回てんかんを繰り返し、死んでしまう。)
- d. その僕が出掛ける時にもう軒下で**てんかん**起こして
- e. 多分死んでいたんだろうと
- f. (た) 軒下で**てんかん**起こしたが為に
- g. その要は出られなくて
- h. 引っ掛かっちゃって
- i. 出られなくてそのまま死んじゃったんじゃないのっていう話をしたんですけど

(S02M0198: 558.7-712.8)

(8) においても同様に、(8c-f) の「水」が同一の対象を指しているかどうか、水が質量名詞であるため曖昧である。

- (8) a. でこのティータイムなんですけれども
- b. この標高の高いところでは高山病という非常に危険な可能性があるのです

- c. えー水が非常に重要になります
- d. ですから大体一日に二リットルの水を取ってくださいと言われて
- e. 食事の時は必ずマグカップで二杯分の水を飲みますし
- f. 途中途中で必ず水をほあの一飲みたくなくても飲まされるという感じで
- g. 水分補給を重視しておりました (S01F0151: 339.78-341.44)

一方、(6d,f)の「それ」は明らかに祖父がある日買ってきた菓子パンと同一のものを指している。このような代名詞が他の名詞に先行する傾向と考え合わせ、本研究では、語順は定性に敏感であり、定名詞は前方に生起し不定名詞は後方に生起すると一般化しておく。

5 述語の後ろに生起する名詞

上述したように、模擬講演において述語のあとに生起する項は稀だったため、Nakagawa et al. (2008)におけるCSJ対話部分の後置文の分析結果と比較した。Nakagawa et al. (2008)は、後置要素のピッチ・ピークの有無によって後置文を2種類に分け、それぞれの指示距離(Referential Distance: Givón, 1983)を計測した。この場合の指示距離とは、間休止単位(inter-pausal unit: IPU)を単位として、*²後置要素の名詞を含む単位と、それ以前にその指示対象を指す名詞・代名詞(ゼロ代名詞)を含む単位の間にあるIPUの数である。これは指示対象の活性化コストを近似する意図で考案され、指示距離が大きいほど活性化コストが大きく、指示距離が小さいほど活性化コストも小さいと考えられる。例えば(9)は1行1IPUで区切られた発話の例である。(9b)で「これ」が述語の後ろに生起している(「これ」を後置要素と呼ぶ)。「これ」の指示対象は、(9a)の「アンケート用紙」と同一であり、(9a)は(9b)よりも1IPU前に生起しているため、指示距離は1となる。

- (9) a. L1: えーー 調査をするのにアンケート用紙を配ったってことなんですが
- b. L2: どのくらいこう配ってどのくらい回収できるものなんですかこれは (D04F0050: 588.8-597.0)

これと同様の手法で、CSJ模擬講演に生起した名詞と代名詞の指示距離を、語順別に集計した。表5は後置要素の指示距離、表5は述語の前に生起した要素の指示距離の平均をまとめたものである。まずNakagawa et al. (2008)の結果(表5)を確認しておく、後置要素にピッチ・ピークがない(9b)のような場合は、指示距離が小さく、活性化コストが低い名詞が後置されていると考えられる。一方、(本研究ではこれにはあまり注目しないが)後置要素にピッチ・ピークがある場合はない場合よりも、指示距離が大きく、活性化コストが相対的に大きい名詞が後置されている。それに対して、述語の前に生起する要素の指示距離(表5)は、ピッチ・ピークなしの後置要素の指示距離よりも全体的に大きく、活性化コストも大きいことがわかる。つまり、ある名詞の指示対象の活性化コストが小さいときは述語より後にピッチ・ピークなしで、活性化コストが大きいときは述語より前に発話される傾向があることがわかった。このことは、Givón (1983)において他の言語で指摘されていた傾向と一致する。

6 議論

結果をまとめると、述語より前に生起する名詞のうち、(1)定情報を表す名詞はほかの名詞よりも前に、(2)新情報、P, Sなど焦点と関わる名詞はそうでない名詞よりも後に発話されることがわかった。また、(3)述語より後に生起する名詞は前に生起する名詞よりも活性化コストが低いことが明らかになった。

*² Givón (1983)は間休止単位ではなく節を単位としている

表4 後置要素の指示距離

	後置要素のピッチ・ピーク	
	無	有
指示距離	6.9	39.7

(Nakagawa et al., 2008, p. 13)

表5 述語の前要素の指示距離

	語順		
	1	2	3
指示距離	20.9	23.0	41.1

何故このような傾向があるのだろうか？この傾向を、話し手・聞き手の談話処理や発話産出という観点から説明することは出来るだろうか？以下の節では、それぞれに関して動機付けを議論する。

6.1 述語の前要素: 前方に生起する名詞

伝統的に指摘されている通り、すでに言及された要素に文頭で再び言及することは、これから言われる文の中での「いかり」の役割を果たす。それ以外にも、本研究では2種類の動機づけを提案したい。

まず1つ目の動機付けは、ゼロ代名詞の指示対象の確立である。模擬講演の発話例を多く見てみると、「XがYなのですが、(その) X/Y (というの) は…」という例が多いことに気づく。Clancy (1980) も、日本語は同じ指示対象を指す名詞を繰り返す傾向があると指摘しているが、それが何故なのかはわからないと述べている。例えば(10)では、(10a)で「管理検査組」が導入された後、(10b)で同じ対象を指す名詞「三人」が繰り返されている。

- (10) a. で特に僕ら**検査管理組**っていうのは三人いたんですが
 b. **その三人**はまー非常に茂原を愛してですね
 c. んでその後も年に一回ぐらいはえーまø訪問して
 d. で最初のうちは工場の人達もø訪問してたりしたんですけど
 e. 最近はえーさすがにそういうこともøしなくなって
 f. あのただ茂原をø通って
 g. あ懐かしいねってこうø喜んでですね
 h. でまん(?ひ)一軒ぐらいこうあの食事をしにø行ったりとかですね
 i. えーいうことでø楽しんだりしてます (S05M1236: 609.5-639.4)

本研究では、これは日本語がゼロ代名詞を多用しており、明示的な代名詞とは異なり有生性や性・数の情報がないため、指示対象の確立に手間がかかるためであると提案する。その繰り返される名詞が他の名詞よりも先に生起するのは、その名詞の掛かり先が広いためであると考えられる。例えば、(10)では、「三人」は、(10c-i)の主語になっていることからわかるように、掛かり先が大きい。(ゼロ代名詞をøで表し、便宜的に動詞の直前に表記している。)この「三人」の掛かり先が大きいことが、(10b)で、「茂原」よりも「三人」を先に発話する動機付けになっていると考えられる。

2つ目の、すでに言及された要素が次の発話の文頭で繰り返される傾向の動機付けは、Den and Nakagawa (2013) で提案されている通り、発話の続きを考える時間かせぎである。(10)の例で説明すると、すでに出ている表現「三人」は比較的言いやすく、「三人」と言っている間に話し手は次の発話を考えていることが考えられる。実際、彼らの調査によれば、後に続く発話が長いほうが、名詞の繰り返しが起きやすい。^{*3}

^{*3} ただし Den and Nakagawa (2013) の調査は CSJ の対話を用いて行われ、話者が交替するときの名詞の繰り返しのみに注目している。

このように、定情報を表す名詞がほかの名詞よりも先に産出される、さまざまな機能的動機付けが存在する。生成文法における最近のカートグラフィー研究 (e.g., 遠藤, 2014) でも話題を最も上の階層に (そして焦点をその下の階層に) 位置づけるが、話題と関連する定情報が先行するには機能的な理由があり、また下で述べるように、述語の後に産出される場合もその動機付けがある。

6.2 述語の前要素: 後方に生起する名詞

焦点に関わる特徴 (新情報や S, P) が後方、典型的には述語の直前に生起するのは、述語とともに焦点という単位をなしているからだと考えられる。Lambrecht (1994) が指摘するように、述語がすでに話し手と聞き手の間で共有されていて異論をとなえる箇所でない、(11b) のような場合は、自然発話では稀にしか見られない。「何してるの?」という質問の答えになる構造が最も一般的だと Lambrecht は述べている。

(11) a. **A:** [テレビを見ている B に向かって] 何見てるの?

b. **B:** ニュース 23 (を見てるんだよ)

(作例)

今後、実際の発話データを見て確かめることが必要であるが、今は Lambrecht の指摘が正しいとを仮定して (筆者には直感的に正しいと思われる)、新情報、S、P などの名詞が動詞の直前に生起しやすいのは、これらの名詞が述語とともに焦点という単位を構成するからだと提案しておく。例えば、(12) において、S「感じ」は述語「する」の直前に生起している。これは「感じがする」全体で焦点という単位を構成しているからである。

(12) そのコントラストというのは何かとてもこうエキゾチックと言うか **不思議な感じ**がしまして

(S00F0014: 1042.9-1.47.0)

6.3 後置要素

6.1 節で議論したように、述語の前に現れる、他の名詞よりも先行する要素は、すでに言及したものにもう 1 度冒頭で言及することによって「いかり」の役割を果たしたり、以後の発話のゼロ代名詞の解釈を助けたり、話し手の時間稼ぎに使われたりする。では、すでに言及された要素に、述語の後で言及するのはどのような動機付けがあるのだろうか?

発話は、イントネーションによりいくつかの単位に区切られており、1 つのイントネーションの単位を発話するときは、普通、高いピッチから始まり、徐々に下降していく (Lieberman and Pierrehumbert, 1984; Den et al., 2010)。そして、ピッチ・ピークなしの後置要素は、活性化コストが低いため、低いピッチで言われる (例えば英語でも Halliday (1967); Bolinger (1972) などで指摘されている)。すなわち、活性化コストが低い指示対象を指す名詞は、イントネーション上の都合で述語の後ろ (発話末尾) で話し手にとって発話しやすいと言える。Siouan, Caddoan, Iroquoian などの言語における述語の後ろに現れる名詞を調べた Mithun (1995) も、同様の結論に達している。

このような後置文がなぜ独話よりも会話に多いのかに関しては、依然として謎が残る。渡辺 (1971) によれば、発話末の終助詞「ね」や「よ」は聞き手に向けられた態度を表している。後置要素は、(1a) のように後置要素は「ね」や「よ」よりもさらに後から発話されるため、もしかしたら、より聞き手への指向性が強いかもしれない (CSJ の模擬講演では「よ」や「ね」は頻繁に生起する)。Tanaka (2005) は、会話における後置文を相互行為の観点から分析し、選好的な応答 (依頼に対する承諾など) はスムーズに行うという動機付けが強いため結論部分である述語を早く産出すると述べている。一方、非選好的な

応答（依頼に対する拒否など）には遅れや非流暢性が伴うため、主語や目的語を述語の前に産出して、拒否する時間を引き伸ばす。例えば (13) は 40 代女性 3 人の会話で、服の流行が昔に戻って来ており、チカコの娘は彼女が若いときのブラウスを着ているという話をしている。これに同意したケイコ (13b) が「おんなじよ襟も」とチカコに同意する。Tanaka によればこの発言はチカコの発言 (13a) の直後に即座に行われており、チカコの発言を効果的に支持している。

- (13) a. **チカコ:** 今の形とまったくおんなじ.=
 b. **ケイコ:** =おんなじよ ↓=[襟も.
 c. **エミコ:** [あ!ほんと:: (Tanaka, 2005, p. 406)

一方、不同意などの非選好連鎖の応答部分の場合はより慎重に行われ、この場合はゼロ代名詞でも良いはずの項が述語の前に産出される。

7 おわりに

本研究は、機能的な観点から日本語話し言葉の語順と情報構造の関連を多角的に検討した。今後は Yamashita and Kondo (2008) のように長さなどを考慮に入れたり、Tanaka (2005) のような相互作用的な観点も取り入れつつ、より詳細で複合的な語順予測のモデル化を課題とする。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1972) "Accent is Predictable (If You're a Mind Reader)," *Language*, Vol. 48, pp. 633–644.
- Clancy, Patricia (1980) "Referential Choice in English and Japanese Narrative Discourse," in Chafe, Wallace ed. *Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*, Vol. 3 of *Advances in Discourse Processes*, New Jersey: Ablex, pp. 127-202.
- Den, Yasuharu, Hanae Koiso, Takehiko Maruyama, Kikuo Maekawa, Katsuya Takanashi, Mika Enomoto, and Nao Yoshida (2010) "Two-level annotation of utterance-units in Japanese dialogs: an empirically emerged scheme," in *Proceedings of the 7th International Conference on Language Resources and Evaluation*, Valletta, Malta.
- Den, Yasuharu and Natsuko Nakagawa (2013) "Anti-Zero Pronominalization: When Japanese Speakers Overtly Express Omissible Topic Phrases," in Eklund, Robert ed. *Proceedings of Disfluency in Spontaneous Speech (DiSS 2013)*, pp. 25–28, Stockholm.
- Du Bois, John W. (1985) "Competing Motivations," in Haiman, J. ed. *Iconicity in Syntax*, Amsterdam: John Benjamins, pp. 343-366.
- DuBois, John W. (1987) "The Discourse Basis of Ergativity," *Language*, Vol. 63, pp. 805-855.
- Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information Structure: The Syntax-Discourse Interface*, Oxford: Oxford University Press.
- フィアラ, K. (2000) 『日本語の情報構造と統語構造』, ひつじ書房, 東京.
- Givón, Talmy (1976) "Topic, Pronoun, and Grammatical Agreement," in Li, Charles N. ed. *Subject and Topic*, New York: Academic Press, pp. 149-187.
- Givón, Talmy ed. (1983) *Topic Continuity in Discourse*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Halliday, M. A. K (1967) *Intonation and Grammar in British English*, Paris: The Hague.

- Keenan, Edward L. (1976) "Towards a Universal Definition of "Subject";" in Li, Charles N. ed. *Subject and Topic*, New York: Academic Press, pp. 303-334.
- 小磯花絵・伝康晴・前川喜久雄 (2012) 「日本語話し言葉コーパス RDB の構築」, 『第1回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp.393-400, 国立国語研究所, 東京. (http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no1_papers/JCLWorkshop2012.53.pdf よりダウンロード可能).
- Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Liberman, Mark and Janet B. Pierrehumbert (1984) "Intonational Invariance under Changes in Pitch Range and Length," in Aronoff, Mark and Richard T. Oehrle eds. *Language, sound, structure: studies in phonology presented to Morris Halle by his teacher and students*, MA: MIT Press, p. 157-233.
- 前川喜久雄 (2006) 「概説」, 『日本語話し言葉コーパスの構築法』, 国立国語研究所, 東京, pp.1-21. (http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/k-report-f/01.pdf よりダウンロード可能).
- Mathesius, Vilém (1928) "On Linguistic Characterology with Illustrations from Modern English," in Vachek, J ed. *A Prague School Reader in Linguistics*, IN: Indiana University Press, pp. 59-67.
- Matsumoto, Kazuko (2003) *Intonation Units in Japanese Conversation: Syntactic, Informational and Functional Structures*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Mithun, Marianne (1995) "Morphological and Prosodic Forces Shaping Word Order," in Downing, Pamela and Michael Noonan eds. *Word Order in Discourse*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 387-423.
- Nakagawa, Natsuko and Yasuharu Den (2012) "Annotation of Anaphoric Relations and Topic Continuity in Japanese Conversation," in *Proceedings of the Eighth International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC'12)*, pp. 179-186, European Language Resources Association ELRA, Istanbul.
- Nakagawa, Natsuko, Yoshihiko Asao, and Naonori Nagaya (2008) "Information Structure and Intonation of Right-Dislocation Sentences in Japanese," *Kyoto University Linguistic Research*, Vol. 27, pp. 1-22.
- Nemoto, Naoko (1993) "Chains and Case Positions: A Study from Scrambling in Japanese," Ph.D. dissertation, The University of Connecticut, CT.
- Ono, Tsuyoshi (2007) "An Emotively Motivated Post-Predicate Constituent Order in a 'Strict Predicate Final' Language: Emotion and Grammar Meet in Japanese Everyday Talk," in Suzuki, Satoko ed. *Emotive Communication in Japanese*, Amsterdam: John Benjamins.
- Ono, Tsuyoshi and Ryoko Suzuki (1992) "Word Order Variability in Japanese Conversation: Motivations and Grammaticalization," *Text*, Vol. 12, No. 3, pp. 429-445.
- 佐伯哲夫 (編) (1998) 『要説 日本語の語順』, くろしお出版, 東京.
- 高見健一 (1995a) 『機能的構文論による日英語比較』, くろしお出版, 東京.
- 高見健一 (1995b) 「日本語の後置文と情報構造」, 高見健一 (編) 『日英語の右方転移構文』, ひつじ書房, 東京, pp.149-165.
- Tanaka, Hiroko (2005) "Grammar and the "Timing" of Social Action: Word Order and Preference Organization in Japanese," *Language in Society*, Vol. 34, pp. 389-430.
- 渡辺実 (1971) 『国語構文論』, 塙書房, 東京.
- Yamashita, Hiroko and Tadahisa Kondo (2008) "Effects of Phrase Length and Referentiality in the Word-Order," 『電子情報通信学会技術研究報告思考と言語』, 第108巻, pp.125-130.
- 遠藤喜雄 (2014) 『日本語カートグラフィー序説』, ひつじ書房, 東京.